運動会

日常の保育に根ざした行事として

上坂元　絵里

最近では、春に運動会を行う学校・園が増えているようですが、やはり運動の秋、十月は運動会があちらこちらで開かれることと思います。

私自身、子ども時代、運動は苦手な方で体育の授業や運動会には、楽しからぬ思い出が残っています。同じ運動を一斉にする授業では、得意な人は良いけれど、苦手な人は劣等感の芽を植えつけられたものです。私の場合、大人になってからは、幸い、スポーツ好きになったものの、集団生活のスタートである幼稚園生活、他者との比較ではなく、体を動かすことが楽しいと思う人になって欲しいという願いを持ちながら、運動会という行事

についても考えているわけです。

もう随分前のことになりますが、附属幼稚園で、前期六月、後期十一月の二回、教育実習をいたしました。

後期、年長組の実習の間、保育中に運動会での遊戯を複数クラス、男児も女児も大勢で楽しんでいました。担任の先生はいなくても大きな輪ができ、実習生の私も何度かその輪に加えてもらううちに、自然に振り付けを覚えられる程でした。その折、幼稚園の運動会では、練習を重ねて当日に完成されたものを見てもらうのではなく、例えば、遊戯ならば遊びの中で自然に振り付けを覚え、それを運動会が終わってからも、更に楽しめるようなものにしたいと考えるという主旨の話を聞きました。自分自身の記憶に残る運動会、何度も何度も練習をさせられ、当日が終わると、ほっとする思いばかりが残ったのとは、随分違う思いが子ども達の中に残ったのだろうと感じたものです。

現在でも、毎年十月に、午前中で終わる運動会を行っていますが、直前に、一度予行はするものの、クラス全員、あるいは園全員が集まって運動会の練習というものは、殆どしていません。

子ども達が、それぞれに自分がしたい遊びに取り組む、日々の主体的な幼稚園生活に、できるだけ自然な形で、運動会をと考えているわけです。

例えば、年長組では、近年、リレー競技をしています。保育室の棚には、リレーのバトンもおいてあり、年中組の子どもは、年長組が遊びの中でリレーをしているのを見て、仲間に入れてもらったり、あるいは、運動会で年長組の立派な姿を見て、その後自分達だけでチームを作ってやってみようとしたりしま

す。そんな経験から、年長組になると、集団で遊ぶ遊びの一つとしてリレーを繰り返し楽しむこともあります。もっとも年を追って引き継がれるとはいえ、その年によって、又、クラスによって、そうした状況にはかなり差異がみられます。

リレー遊びの中では、コース取り（花壇まわり・お山まわりなど）を決めたり、チーム分けをしたりを子ども同士で相談します。もちろん、最初のうちは、大人の手助けが必要ですぐにもめてやめてしまったりしますが、段々に自分たちで、すすめていかれるようになります。遊びといっても、子ども達の中には、勝敗の意識というのがあらわれてきますから、自分は○○ちゃんと同じチームになりたいといった例もでてきます。このような考え方も、自由に遊ぶ中で、○○ちゃんは○○が得意といった他者理解、人の良さを認め合う人間関係につながっていくようにと配慮したいと思っています。子ども達だけに任せてしまうと、いつも仲よしは同じチーム、入りたいのに違うチームになってしまう、といったことにもなりがちなので、大人も仲間に入ったり、それを機会に新しい仲間が入るようなきっかけ作りは必要になってきます。さて、それでは、苦手な人は、いつもリレー遊びに参加しないのではと思いがちですが、少し苦手意識をもった子どもでも、仲良しの子がやっているからとか、何度かやるうちに大分うまく走れるようになった等のきっかけで、参加する姿がみられます。無理矢理、皆で走らされて、ひどく苦手意識をもつのとは、大きな違いがあると思います。子ども達の中にも、最初は○○ちゃんはおそいからといった声が出ることもありますが、おそくとも一生懸命走る姿は、「○○ちゃん前より早

くなったね」といった考え方を引き出してくれるようです。

リレー遊びひとつとっても、ラインの中へは入らない事、バトンの受け渡し方等、ルールや方法を伝えなくてはなりませんが、この点も、保育者が、チームの一員として走ることで、見て真似て理解するのが子ども達にとっても自然なようです、その上で、必要に応じて個人的に指導していくとよいようです。

子ども達が、可愛い頬を紅潮させて走る姿には、思わず感動してしまうものですが、それを見守る大人たちの、ともすれば勝敗にこだわった応援をする姿などにも運動会の難しい面が感じられます。もっとも全般的には、できるだけ、勝敗が五分になるようにといった配慮での運営は、幼稚園ならではで、とても良いのではと思っています。

個々の種目について述べていくと、長くなってしまいますが、遊戯についても印象に残ったことがありました。

その年の年長組には、とても踊りの好きなM子という女児がいました。子ども同士の影響の深さは大変なもので、その子のおかげで、踊ることをとても楽しむクラスの雰囲気がありました。

運動会では、隣のクラスの先生と相談して『チキチキバンバン』に振りつけをしました。リズミカルな曲で、やや時代は古いけれど、空も飛べる万能車という、夢のあるストーリー、男の子も照れずに楽しめるのでは等、考えて選曲しました。前述したように、遊びの中で、自然に覚えてもらえるよう、振り付けもそれほど難しいものではありませんでした。

両手に二色の短いリボンをつけて踊ること

も年少組には魅力的にうつったようで、運動会後には、年少組の人たちからも踊りたいという声がたくさん出てきました。最初のうちは、年長の子ども達にまじって踊ったりしていましたが、そのうち、年少組に、年長児が数人でかけていって、一緒に踊って教えてあげるといったほほえましい光景もみられました。

ある時は、お遊戯室と呼ばれる大きいへやで、K子が年少児に踊りを教えていました。わかりやすく踊ってみせながら、年少児が踊ると、「そう、そう」とニッコリとうなづく姿は、他者を認め、伸ばすという保育の理想を実現しているようで、こちらがうっとりとみとれてしまうようでした。

M子・K子達が卒園した翌年、私は、彼女たちが伝えた『チキチキバンバン』を年中児と一緒に踊ったものです。

このように、運動会をきっかけにして、遊びの幅が広がるということもありました。

今回は、どちらかというと運動会を通しての子ども達の嬉しい育ちを中心に書いてきました。

様々の課題もあるでしょうが、日常の保育から出発し、そして、日常の保育をより豊かにするための「運動会」。

今年は、どんな運動会になるのでしょうか。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）